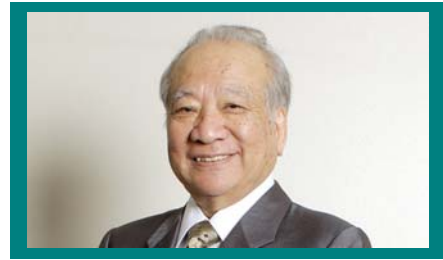


2 1 世紀の日本のかたち（20）

-- 戦争のかたち、平和のかたち --



戸沼幸市
＜（財）日本開発構想研究所 理事長＞

1. 8月15日の記憶

あの夏の日にはミンミンゼミが盛んに鳴いており
ました。

天皇陛下の大事な玉音放送があるということで、
家に戻って弟たちとラジオに聞き耳を立てました
が雑音が多く、意味がほとんど理解できませんで
した。ただ、大人たちは戦争が終わったらしいと
話し合っており、何かほっとした様子でした。



私は終戦の日を
12才、小学校6年
生の時、北海道の
函館で、このよう
にして知りました。
当時の新聞、ラジ
オなどの情報伝達
状況下では、現場
から地方に事が伝
わるまでにはタイムラグがあり、万事ぼんやりと
していました。それでもアメリカの飛行機が広島
と長崎に新型（原子）爆弾を落としたこと、東京
に連日、大空襲があったことが人づてに伝わっ
てきておりました。私どもにとって、事の重大さを
知ったのは8月15日以降のことでした。

昭和8年生まれの場合、赤紙一枚で兵隊に

とられる一歩手前で終戦となり、この戦争に駆り
出されることを免れましたが、同居していた10歳
年上の従兄が開戦3年目にしてアッツ島（Attu）
で全滅した日本兵の中の一人でした。

2. 戦争のかたち

昭和16（1941）年12月8日の太平洋戦争以来、
日本の国のかたちは日常の生活風景も社会体制も
景観も、丸ごと戦争のかたちに変わってゆきまし
た。軍備が増強され、軍隊が強大になり、「軍」の
かたちが国土空間を支配しました。同時にまちづ
くりも、隣組が上意下達の戦争遂行の社会基礎単
位になり、都市計画も天皇賛美の神都都市計画、
皇都都市計画、軍事施設を核とする軍都計画、敵
の飛行機による空襲を防ぐ防空都市計画としてつ
くられました。

さらには、大東亜共栄圏、大東亜新秩序建設の
ためと称して、「国土計画設定要綱」が昭和15
（1940）年9月24日に近衛文相内閣によって閣議
決定がなされるのです。

この「国土」とは現日本列島に加えて、南樺太、
朝鮮、台湾であり、更には満州（現在の中国東北
部）、支那（全中国）、南洋（東南アジア）を視野
に入れた無謀、妄想のものでした。

しかし、太平洋戦争緒戦の国をあげての国民高揚の図柄から大東亜に広がった戦線各地での敗北の悲惨な絵図に、そして日本列島自体が戦場となり、アメリカによって壊滅されるまでにはさほどの時間を要しませんでした。

沖縄での民間人を巻き込んだ戦争、広島・長崎のアメリカ空軍による原爆の投下は人びとを殺傷し、都市を物理的に破壊した以上に、生き残った人びとにも深刻な後遺症を残しました。

20世紀は世界史的にみて戦争の世紀でした。特に世紀前半はヨーロッパにもアジアにも2度の世界大戦がありました。

大日本帝国も主役を演じ、日露戦争(1904～05)、第一次世界大戦(1914～18)、日中戦争(1937～45)、第二次世界大戦(1939～45)、太平洋戦争(1941～45)と間断なく参戦しました。

平和とは戦争と戦争の間の一つの休息期間であるかのようにでした。

近代日本は明治以来、富国強兵を国是とし、天皇を頂点とするピラミッド国家をつくり上げましたが、昭和年代ここに狂気が入り、膨らんで、国は丸ごと暴力装置になり、太平洋戦争に突入して

毎日新聞社



国会議事堂前が耕地に。窮迫を極めた食料事情で白亜の殿堂もご覧のとおり＝1943年7月撮影
(毎日新聞 戦時下の「食」より)

ゆきました。そして国内外に筆舌につくしがたい悲劇をもたらしました。

昭和20(1945)年8月15日は、日本の大きな変わり目、日本人の精神の大きな変わり目になりました。

この8月15日を、戦火の外地、外国で、戦災の内地で死と隣り合わせに迎えた人びと、親から離れて疎開先で迎えた少年少女と、場所も年齢も様ざまに違いありませんが、この日はどの日本人にとっても、一つの時代の終わりと新しい時代の始まりを予感させるものとして脳裏に深く刻まれることになりました。

3. 平和のかたち

あの日から数えて64年、平成21(2009)年、また8月15日がやってきました。これに先立ち、8月6日は広島、8月9日は長崎で原爆被災者慰霊、平和祈念式典が行われました。式典ではアメリカのオバマ大統領の核廃絶宣言(4月5日、チェコの首都プラハで演説)に重ねて、秋葉広島市長、田上長崎市長が「核兵器のない世界の恒久平和を求める」メッセージを読み上げました。

8月15日、終戦記念日には東京では都慰霊堂、千鳥ヶ淵戦没者墓苑、靖国神社、日本武道館で、戦没者に対する慰霊の式典が行われました。

皇居お堀端の千鳥ヶ淵ではこの日もミンミンゼミが盛んに鳴いておりました。



千鳥ヶ淵戦没者墓苑でも今年8月15日12時を期に人びとは、戦争で亡くなられた人びとの霊に黙祷を捧げた
(’09.8.15撮影)

日本はあの日、国のかたちを戦争から平和へ、日本再生へと向うことになりました。

そして再生の「芯」に、国民主権、基本的人権の尊重、戦争放棄の平和主義を据えました。

しかし戦争の傷は深く、215 都市が被災し、罹災人口は 1000 万人近くにもなりました。これに対し、新政府は戦災地復興計画基本方針を閣議決定（昭和 20（1945）年 12 月 30 日）し、私どもの先輩の都市計画関係者は平和公園をつくり戦災復興の都市計画に全力で取り組みました。

戦争の国土計画を裏返して、国土総合開発法が公布され（昭和 25（1950）年 5 月 26 日）、以降 5 次にわたり国により全国総合開発計画がつけられました。これは社会経済計画と連動して、戦災復興を遂げ世界が目を見張るほどの活力のある経済社会を築いてきました。日本人の底力を感じます。

21 世紀初頭の現在、「民」、地域主体の広域圏計画の束として、保全型の新しい国土形成計画がつけられつつあります。これには、東アジアを共生の平和な生活圏とする視点も入っております。

これらの国土計画の評価は、時代状況につき合わせて様ざまになすことができますが、国のかたちとして平和のかたちに求め続けたことです。

日本が戦後 64 年、戦争のない平和な時代を保ったことは奇跡にも思えます。

20 世紀後半には、地球から戦争が消えたわけではなく、日本の間近で朝鮮戦争（1950～53）、ベトナム戦争（1966～1975）と続きました。21 世紀に入っても国家間の争い、戦争が起き続けています。

21 世紀早々のニューヨークの W T C（World Trade Center：世界貿易センタービル）のテロ爆破事件の映像は強烈でした。これにつづくイラク戦争はいまだ終結しているとはいえません。

更には戦争の手段として禁じ手であるはずの原

子爆弾の保有国は増えています。国家を取巻く状況がグローバル化する中で、日本も戦争に巻き込まれる危険と背中合わせにいるとも言えます。

また、昨今の日本の社会には戦争にもつながりかねない狂気が見え隠れしています。自殺者が年間 3 万人を超える状態が続き、盛り場で人が人を突発的に無差別に殺傷する事件が起こっています。

平和な日常に潜む狂気は絶えることがないのかもしれないかもしれません。平和のかたちも一本調子のものでなく、血走った平和のかたちも現存しています。

かつて戦争が家族や親しい人びとを有無をいわず引き離し、死に至らしめた状況を知るものにとっては、村や街に生活する人びとが一日一日を平穏に暮らしていける日常こそが身にしみて大切なことと思えるのです。

この夏、8 月 30 日は政権選択をかけた総選挙と
か、21 世紀の国のかたち、「政」のかたちをめぐって各政党はマニフェストを掲げて争っております。グローバル時代の国家の安全保障についても争点の一つになっております。



今年の夏もミンミンゼミが盛んに鳴いていた。（'09.8.15 自宅近くの公園で撮影）

日本が国づくりの中心に、「平和憲法」を据え、これを保持し、この土台の上に築いた平和な国のかたちは、21 世紀の国家のあり方につながる貴重な財産です。

毎年の 8 月 15 日は、平和への切実な願いを、原点に立ち返って思い出す日だと考えます。

（2009. 8. 15）